O2-018

教育現場における医療的ケアに対応する看護師の役割―教育の場の医療介入の難しさについて―

中島 千佳子、牛島 美穂、原島 光代

公益社団法人　福岡県看護協会訪問看護ステーションくるめ

【はじめに】公立学校等に在籍する医療的ケアが必要な幼児児童生徒の数は、9,693 人で、医療的ケアを行うために配置されている看護師の数は 2,881 人である 1）。日常的に「医療的ケア」が必要な児童生徒は増加傾向にあり、文部科学省は、学校における医療的ケアの環境整備の充実を図るため、自治体等による看護師配置等の支援を行っている。A 市では、特別支援学校への看護師の配置委託があり、特別支援学級へは市独自の施策で学校訪問支援事業が実施されている。当事業所は双方の支援を行っている。看護師は、医療機関と連携し必要な医療的ケアを行い、療育、福祉、教育関係者とも連携しながら、子供の状況に的確に対応できる安全な教育環境を整える役割を担うことが期待されている。しかし、教育の場における 看護師の役割の不明確さ、子どもの症状・重症度に対する見方の違い、看護師・教員・養護教諭の連携・協働に関することが報告されている 2)。そこで、A 市の教育現場での看護の現状と教育現場における看護師の医療展開の困難性を明らかにするため、特別支援学校と学校訪問看護を経験した看護師を対象に半構成的インタビューを行い、現状の課題を抽出し、安全な教育環境に寄与する役割について報告する。
【倫理的配慮】所属する事業所長の承認を得て実施した。
【結果】1._ A 市の教育現場で看護を行う仕組み 1 ）_ B 学校における医療的ケア対応事業：学校に看護師を配置することで、医療機関と連携した医療的ケアを実施するとともに、子供の状況に的確に対応できる安全な教育環境の整備を図る。2 ）_ 学校訪問支援事業：学校において日常的に医療的ケアを必要とする児童生徒の保護者に対して、訪問看護を活用する際に必要な費用の補助金を交付するもの。2._ A 市の「医療的ケアが必要な児童生徒」の人数 B 学校における医療的ケアを受けている児童生徒は 14 人。学校訪問看護支援事業を利用する児童生徒は 5 人。3._ 行っている医療行為（複数回答）B 学校の医療行為の内容は、吸引 13 人。経管栄養 10 人。導尿 1 人。呼吸管理 4 人。学校訪問看護支援事業利用児童生徒の医療行為内容は、吸引 3 人。経管栄養 1 人。導尿 2 名。呼吸管理 1 人。4._ 課題・困難性

O2-019

通常学級に通う呼吸の医療的ケアが必要な生徒に関わる健常な生徒の思い

新家 彰子 [1,2]、山口 大輔 [4]、堀田 法子 [3]

名古屋市立大学大学院　看護学研究科　博士前期課程 [1]、
中部大学　生命健康科学部　保健看護学科 [2]、
名古屋市立大学大学院　看護学研究科 [3]、
あいち小児保健医療総合センター [4]

【目的】健常な生徒が通常学級に通う呼吸の医療的ケアが必要な生徒と出会う時、及び関わる際の思いについて明らかにすることを目的とした。
【方法】対象は、呼吸の医療的ケアが必要な生徒（以下、医療的ケア児）と関わる健常な生徒（以下、健常な生徒）及び医療的ケア児の保護者。健常な生徒へ半構造化面接を実施し、同意を得て録音した内容を逐語化し、質的帰納的に分析した。医療的ケア児の保護者へ医療的ケア児の状況の情報収集を行った。名古屋市立大学看護学部研究倫理審査委員会の承認を受け実施した。
【結果】対象は、健常な生徒 6 名及び医療的ケア児の保護者 2 名であった。分析の結果、以下の 2 場面について各々カテゴリー化を行った。1）医療的ケア児との出会いの場面での思いでは、次の 4 カテゴリーが抽出された。医療的ケア児が通常学級にいることに、健常な生徒の経験から得られた【先行概念が修正され、驚く】気持ちを示し、医療的ケア児に興味を持つ一方、話せない医療的ケア児とのコミュニケーション方法がわからず、【医療機器や医療的ケア児への関心や戸惑いが交錯する】思いを抱いていた。【同級生として外見に興味をもつ】と同時に、【医療機器に驚きと恐怖を感じ、医療的ケア児の命を心配する】という思いを抱いていた。2）学校生活で医療的ケア児と関わる場面での思いでは、次の 5 カテゴリーが抽出された。【大人や同級生をロールモデルとし、医療的ケア児の関わり方や気持ちに気付く】ことや、気持ちを理解したいと【自ら接近し、医療的ケア児の気持ちを理解する方法に気付く】思いを抱いていた。【一緒に過ごすことで、医療機器への恐怖が消え、自分たちと同じ存在だと感じる】ことや、身体接触を伴いながら学校行事等に参加し【医療的ケア児や仲間と楽しさを共有し、一体感を感じる】という思いを抱いていた。関わる中で、【医療的ケア児の気持ちを理解できているのか不確かに思う】という感情も抱いていた。
【考察】偏見の発言がみられず、一人の子どもとして興味を示していたのは、入学前に障害児との接触経験が影響したと考えられる。恐怖の対象であった医療機器は、説明することで緊張が軽減する可能性がある。また、学校行事へ一緒に参加するだけでなく、身体的接触を図ることで一体感を感じることが示唆され、医療的ケア児の気持ちの理解の不確かさについては医療的ケア児の家族を含めた話し合いが必要と考えられる。

Presented by Medical*Online